

## サンダルを響かせて

—フィーリクス・ランダルの旅立ち—

楠瀬健昭

### 1. はじめに

1880年4月21日、Liverpool、Birchfield通り17番、Felix Spencerという名の31歳の蹄鉄工が、2年余りの闘病の末、肺結核で亡くなっている。G. M. Hopkinsは、1週間後の4月28日に、SpencerをRandalという名に変え、血気盛んであった若者を追悼するソネットを書くが、それは哀歌というよりも頌徳の詩であり、この世を旅立つランドルへの、はなむけの言葉であると言える。‘Felix Randal’は、司祭詩人ホプキンズが神の栄光を讃えるブライト・ソネット群と、神の不在を嘆くダーク・ソネット群との間に位置するものである。このソネットに満ち溢れる幸福感は詩人のものでもある。オクスフォードからリバプールに赴任する間の3か月間、代理司祭として過ごしたBedford Leighでの体験から得られたものである。ホプキンズは人々に歓迎され、教会での説教も好評であった。

### Felix Randal

FELIX RANDAL the farrier, O he is dead then? my duty all ended,  
Who have watched his mould of man, big-boned and hardy-handsome  
Pining, pining, till time when reason rambled in it and some  
Fatal four disorders, fleshed there, all contended?

Sickness broke him. Impatient he cursed at first, but mended  
Being anointed and all; though a heavenlier heart began some  
Months earlier, since I had our sweet reprieve and ransom  
Tendered to him. Ah well, God rest him all road ever he offended!

This seeing the sick endears them to us, us too it endears.  
My tongue had taught thee comfort, touch had quenched thy tears,  
Thy tears that touched my heart, child, Felix, poor Felix Randal;

How far from then forethought of, all thy more boisterous years,  
When thou at the random grim forge, powerful amidst peers,

Didst fettle for the great grey drayhorse his bright and battering sandal!

フィーリクス・ランダル

装蹄師フィーリクス・ランダル、ああ、それでは、あの者は亡くなったのか。わたしの務めは、すっかり終わったのか。骨太で、頑丈、美しい造りをした、あの者が、やせ衰え、やつれ、ついに、からだの中で理性がぶらつき、おおよそ四つ、不治のやまいが、あの者のからだに巣くい、相争うのを見守ってきたのは、誰かと言え、ほかならぬ、このわたしなのに。

病魔があを打ちのめした。はじめは耐えきれず悪態をついたが、終油の秘跡を施され、とかなんとか立ち直った。もっとも、数ヶ月前から、よりやすらかな気持にはなり始めていた、わたしたちの清らかな救いとあがないを、わたしと与えていたから。とまれ、あの者の霊を、神よ、休ませたまえ、どんなふうであれ、あやまちを犯した、あの者を許したまえ。

このように病者を見舞うことで、わたしたちは病者をいとしく思うようになり、病者もわたしたちをいとしく思うようになるものだ。わたしの言の葉は汝にやすらぎを教え、ふれあいが汝の涙をいやしていた、汝の涙はわたしの胸に響いた。わが子よ、フィーリクス、あわれなフィーリクス・ランダルよ。

とても、こんなふうになるとは、そのときは思われてはいなかっただろう、汝がもっとあらくれであったときには。そうしたときには、ふぞろいで不屈の鍛冶場の仲間うちで、ひとときわたくましい汝は、大きな茸毛の鞆馬に、ぴかぴかのぱっかぱっかと響くサンダルをととのえていたからだ。

## 2. ランダルとサンダル

ランダルを火と鍛冶仕事の神ウルカヌスのイメージで捉えている批評家もいる。ギリシャ神話におけるヘーパイストスは、神々の天馬に真鍮の蹄鉄を打ち、ヘルメスの翼あるヘルメットとサンダルもデザインした。こういう連想は禁じ得ないとしても、このソネットは、いわゆる *priestly poems* のひとつであり、聖職余滴とも言われる。

1879年11月23日、ベッドフォード・リーでの説教の中で、ホプキンズがキリストについて、‘Thou art beautiful in mould above the sons of men’（詩篇45, 24）を引用し、‘In his body he was most beautiful...moderately tall, well built and tender in frame’であると語っているのを聞くと、むしろ、なぜかランダルはキリストと重なって見えてくる。病者となったランダルが塗油を受け

たと同様に、その意味合いは違っても、キリストも塗油される（ヨハネ 12, 3）。キリストはメシア、すなわち塗油された人 **Christos** でもある。ランダルの鍛える馬蹄形は、ギリシャ文字オメガの大文字と同じ形状であり、「我はアルパなり、オメガなり」（黙示録 1, 8）のキリストと符合するとも考えられる。また、ヨハネの見たキリストの姿は、「その足は炉にて焼きたる輝ける真鍮の如く」（黙示録 1, 15）とある。炉で精錬された蹄鉄は、あたかも受難を経験したキリストの真鍮のごとき足であり、敵を足下に踏み砕くキリストの足のようである。音をたてて輝くサンダルは、キリストの足をも連想させるように思える。

サンダルを響かせているのは、輓馬であるが、祝福され旅立つランダルのでもある。ソネット最後の三行連句に至り、わたしはそう感じている。つまりこのソネット全体を引き締め、まとめているのは、冒頭と末尾にある、**Randal** と **sandal** という韻を踏む語である。サンダルは一義的には、ランダルの鍛え、輓馬に履かせる蹄鉄である。ローマ帝国の昔、馬の蹄を保護するものは、**hipposandal (soleae ferreae)**であったため、**sandal** が蹄鉄であることは、突飛な表現であるとはいえない。**Randal** は、時系列で見ると **random, rambled, ransom**、と音の変化を楽しみながら、**sandal** へと変化している。サンダルは古代ギリシャ・ローマの人々が利用していた履物であることから、ランダルのあたかも古代ギリシャ・ローマ人になった如くに、さらにローマ軍兵士の如く馬上の人となり、さっそうとこの世を旅立ち、疾駆するようにも思える。**Randal** は古英語 **Randwulf** に由来する短縮語であり、その意味は **rand “shield” + wulf “wolf”** である。**Beowulf** が文字どおりには **‘bee-wolf, a wolf to bees’** 「ミツバチの敵」つまり熊であるならば、**Randal** は **‘shield-wolf, a wolf to shield’** 「盾の敵」つまり槍であると類推できる。ローマ兵が持つ槍を思わせる。

しかし、ランダルのサンダルへと変化したのであれば、やはりランダルの蹄鉄となり、輓馬の蹄と足、ひいては輓馬そのものを守る存在である。ランダルの仕事 **farrier** は、ただ単に鉄を鍛え、蹄鉄を馬に履かせるだけではない。馬の蹄、脚の状態を見極め、ひいてはその馬の健康状態を見極め、手当てすることもあると想像される。装蹄師は **blacksmith** であり、**veterinarian** でもある。すると、ランダルの死してなお、輓馬の脚を守る存在であり、司祭詩人ホプキンズと同じく、癒す側にも属する。古代エジプトの司祭もパピルスでできたサンダルを履いていたらしい。第一三行連句にあるように、司祭ホプキンズは病の床に伏していた教区民ランダルの見舞い、心を癒していたが、同時に癒されてもいた。慰めることによって、かえって慰められる。励ますことによって、かえって励まされる。ランダルのそういう関係性から、癒される側から癒す存在にもなったが、装蹄師であり馬医であることから、もともと癒す存在でもあった。

いかなる仕事であれ、その務めを果たすものは、神に栄光をもたらすが、ラ

ランダルの仕事は、ホプキンズがその例として最初に挙げているものである。ランダルの祝福されないはずはない。また、詩人は装蹄師を **Felix (happy)** と名付け、用意周到に、その名を冒頭で明かすことによって、フィーリクスの死は祝福されるべきものだ、ということを知らせている。フィーリクスは夭折といえるかもしれないけれど、立派に務めは果たしていた。

### 3. 教区司祭と教区民

「ああ、それでは、あの者は亡くなったのか」という言葉は、司祭がフィーリクスの死を伝え聞いたことを示すとともに、フィーリクスの死との距離感を表わす。また、「わたしの務めは、すっかり終わったのか」という、もうひとつの同じように呟きとも落胆とも取れる言葉にも、詩人のフィーリクスの死に対する冷静な受け止め方を感じる。フィーリクスは亡くなり、教区司祭としての自らの務めは終わったと語りながら、同時に疑問形で表現することで、このソネットにおいて、詩人が解決すべきテーマ、「あの者は亡くなったのか」、「わたしの務めは、すっかり終わったのか」をここで提示していることになる。

それだけではなく、オクテブ前半において、詩人は、はやくもランダルの病状を説明するのに巧みである。肺結核の特徴をあざやかに表現しているように見える。ヒポクラテスの「流行病」第一巻第二節に「実に肺癆は多数の人々を死亡させたのであって、この点で当時起こった病気のうち唯一かつ最強のものであった」とあるように、肺結核はおそらく 19 世紀にあっても不治の病と言えた。また、たとえ骨太で頑丈であったにせよ、「肺癆になりやすい体質の人々」もいたらしい。ヒポクラテスにある「患者はすみやかに憔悴し悪化し、…そして死期が近づくと、多くのものがうわごとを言うようになる」ことは、この詩の「あの者が、やせ衰え、やつれ、ついにはからだの中で理性がぶらつき」という描写と見事に一致する。また、「おおよそ四つの不治のやまい」とは、ヒポクラテスに探せば、「悪寒をとまなう熱」、「発汗」、「腸の不調と疼痛」、「少量で濃厚な尿」、「煮熟した痰」、「咽喉の痛みと炎症」などの症状を述べていると思われる。たとえば「熱は完全にひいてしまうことがない」、「痰は吐きどおし」であるため、いずれも「からだに巣くい」命にかかわる症状であるといえる。これらの症状が「相争う」、つまり症状が悪化していくことで、次第にそしてすみやかに死期へと近づく。このようにホプキンズによるランダルの病の描写は簡にして要を得る。

オクテブ後半では、詩人は「わたしの務め」を語る。ランダルの見守ってきた様子を聞くことによって、病に倒れ、死すべき運命にある教区民に対しての、教区司祭の務めがどのようなものであるか、わたしたちは知ることになる。

ホプキンズの 'On Death' によれば、Methuselah は 969 年生き、預言者 Enoch と Elias は、今も生きてはいるが、「死は確実に訪れる」わけで、「いつ、

どこで死が訪れるかはわからないが、「われわれはこの肉体において死すべき運命にある。」「死はたいい不治の病のうに訪れ、不治の病には必ず苦痛が伴う」うに、「死はすべてをわれわれから奪い」、われわれには「死後どうなるのかという恐れもある。」また、死は突然訪れ、人は罪を犯したまま逝くこともある。

こうした、人間の死に対する恐れに対して、神は **the last sacraments**、**the grace of contrition**、**holy hope** を与えてくれる、とホプキンズは語る。最後の秘跡とは、**Penance**、**Extreme Unction**、**Holy Communion** を指すが、「受難と死によってキリストは人間の罪を贖い、そのため人間は救われる」ことから、このソネットの中で、**sweet reprieve and ransom** は、聖体拝領のことである。もちろん、「清らかな救いとあがない」を得るには、罪の告白とゆるしが必要である。罪を痛悔<sup>つうかい</sup>すること、司祭への告白、償いを果たす決意のことで、神から罪のゆるしが与えられるものである。終油、または病者の塗油、ホプキンズは **Holy Oil** とも言うが、それは死を迎えるためだけではなく、むしろ病気から立ち直らせ命を救うためのものである。死の苦しみと霊性を脅かすものに立ち向かう力を与えてくれるものである。詩人は、**anointed** と一語でこれを表現する。司祭のもとで、ランダルは幸いにして最後の秘跡に与ったことが簡潔に描写されている。

なお、3つの秘跡に与れない場合に、ホプキンズは痛悔を勧める。神のために悔い改めることが真の痛悔である。「できることならば、十字架をベッドの前に掲げ、十字架の方を見ながら、まさに命果てようとする救世主に祈りなさい、死の床にあるあなたを見てくださるように」と、救われる方法を具体的に教えてくれる。痛悔もなされなかったとしても、神に救いを求めて、希望をもって祈り続けなさい、とホプキンズは説いている。希望は天に投げられた錨であり、これを離さなければ迷うことはない、「この希望<sup>のぞみ</sup>はわれらの<sup>たましい</sup>霊魂の錨のごとく安全にして動かず、かつ幔<sup>まくら</sup>の内に入る」(ヘブル書 6, 19) に基づいて語る。

オクテブ前半において司祭が見守ったのは、**mould of man** である。**mould** は ‘**earth as the substance of the human body**’ でもあり、「われわれはこの肉体において死すべき運命にある」ことが感じられるが、オクテブ全体を聞けば、‘**heavenlier heart**’ を持つことができ、肉体は滅びても、魂は救われ、**heavenly=connected with heaven** であることから、復活により、「我ら土に属するものの形を有<sup>も</sup>てるごとく、天に属する者の形をも有<sup>も</sup>つ」(コリント 15, 49) ことも予感する。

ただ、ここでわたしたちは、ホプキンズとランダルとの遠い距離感を感じる。見かけ上は超然とした態度を取っていたとしても、この態度こそが、ランダルの死とそのことが意味するすべてを、痛切に、そして個人的にも司祭が感じていることの結果であるとも言えるが、教区司祭にとって教区民の死を看取るこ

とは、司祭の務めに過ぎないようにも見える。それは、I と he という、それぞれを表す代名詞の使い方に端的に現れる。少なくともランダル死の教区民の多くの死の一つに過ぎないのではないかという思いが生まれても不思議はない。

そうした疑念を晴らすように、詩人はオクテーブの会話体から変化をもとめ、セステット前半において、一転あざやかに、弱強調の詩的リズムを刻み、交錯配列法を使いながら、癒す者と病者との関係を us と them という代名詞を用いて一般化しながら、司祭の行いが一方通行的なものではないことを強調する。さらに、thee, thy と親称を用いて、今は亡きランダルに語りかけることで、ふたりの関係が形式的なものではないことを語る。司祭の行いが、司祭の務めゆえのものではなく、教区民のためにあることはもちろん、司祭と教区民のふれあいによって、お互いの魂が高められることも、また感じられる。

一気にふたりの距離を縮めた詩人は、セステット後半に至り、「とても、こんなふうになるとは、汝がもっとあらくれであったときには思われてはいなかっただろう」と、ランダル栄光の時代に戻り、活力あふれるランダルとの対比で、ランダルの死と死に至る状況を、いっそう悲劇的なものに仕立てようとする。しかし、ランダルとその仕事ぶりを賛美する声を聴きながら、この詩に耳を傾ける者は、いつの間にか、神に祝福され、蹄鉄の響き高らかに、この世を旅立つランダルの姿をも思い浮かべることになる。ランダルは確かに亡くなったが復活し、教区民に対する司祭の務めというものは、ランダルがいなくなっても終わりではない。

(2014年5月29日)

#### 《参考文献》

- ヒポクラテス『「古い医術について」他八篇』小川政恭訳、岩波文庫、1963。  
『文語新約聖書』岩波文庫、2014。  
安田章一郎「ホプキンズ詩における曖昧について」Nondum 第7号、1993。  
Cotter, James Finn. *Inscape, The Christology and Poetry of Gerard Manley Hopkins*. University of Pittsburgh Press, 1972.  
Crystal, David. *The Cambridge Encyclopedia of the English Dictionary*. Cambridge University Press, 1995.  
Devlin, Christopher, S.J. ed. *The Devlin and Devotional Writings of Gerard Manley Hopkins*. Oxford University Press, 1959.  
Ellis, Virginia Ridley. *Gerard Manley Hopkins and the Language of Mystery*. University of Missouri Press, 1991.  
MacKenzie, Norman H. *A Reader's Guide to Gerard Manley Hopkins*. Thames and Hudson, 1981.  
McChesney, Donald. *A Hopkins Commentary, An Explanatory Commentary*

*on the Main Poems, 1876-89*. University of London Press, 1968.

Saville, Julia F. *A Queer Chivalry, The Homoerotic Asceticism of Gerard Manley Hopkins*. University Press of Virginia, 2000.

Thornton, R.K.R., and Phillips, Catherine, ed. *The Collected Works of Gerard Manley Hopkins. Vol. I. Correspondence 1852-1881*. Oxford University Press, 2013.

(‘Felix Randal’ のテキストは『ホプキンス詩集』第4版による。「フィーリクス・ランダル」は拙訳である。本稿は、2014年5月17日、関西大学において開催された、第42回日本ホプキンス協会連絡総会での発表内容に、加筆修正したものである。)